第5節　光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査

1．教育学部附属光小学校グラウンド鉄棒設置工事に伴う立会調査

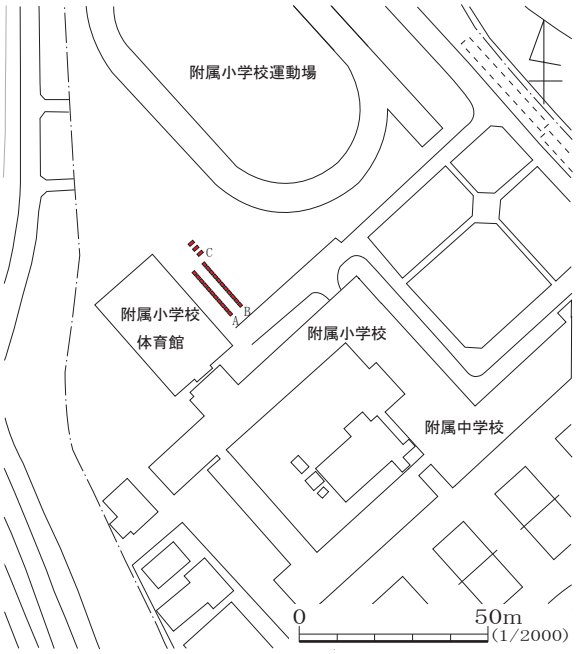

図 93　調査区位置図

写真 120　調査地全景（南東から）

調査地区　光構内小学校体育館北東側

調査面積　約23㎡

調査期間　平成26年12月26日

調査担当　現地:川島尚宗・田畑直彦

遺物:横山成己

調査結果　教育学部より、附属光小学校体育館北東側に鉄棒を設置する計画が提出された。小学校体育館東側に設定されたDトレンチでは地表下遺構検出面落ち込みが確認され、炭化物・材が出土した。Dトレンチからは土師器・鉱滓が出土した。続いておこなわれた事前調査では、Dトレンチを南西方向に拡張した形で調査区が設定された。第2層(褐色砂質土)より1基、第3層より4基の土坑が検出され、土師器・須恵器が出土した。この調査では地表面から約30㎝で遺構が検出されているため、今回の鉄棒設置に伴い基礎部が遺構確認面に到達すると予想されたため立会調査を実施することとした。

鉄棒は3列設置され、低鉄棒を体育館側からA・B地点、高鉄棒をC地点とした(第93・94図)。A・B地点についてはそれぞれ南から1～11、C地点については1～3の子番号を付した。砂地ということもあり、掘り方にはややばらつきがあるものの、A・B地点が約80×110㎝、C地点は約75×160㎝で、掘削深度は約70㎝である。

写真 121　B-11 土層断面（北東から）

写真 122　C-1 土層断面（北西から）

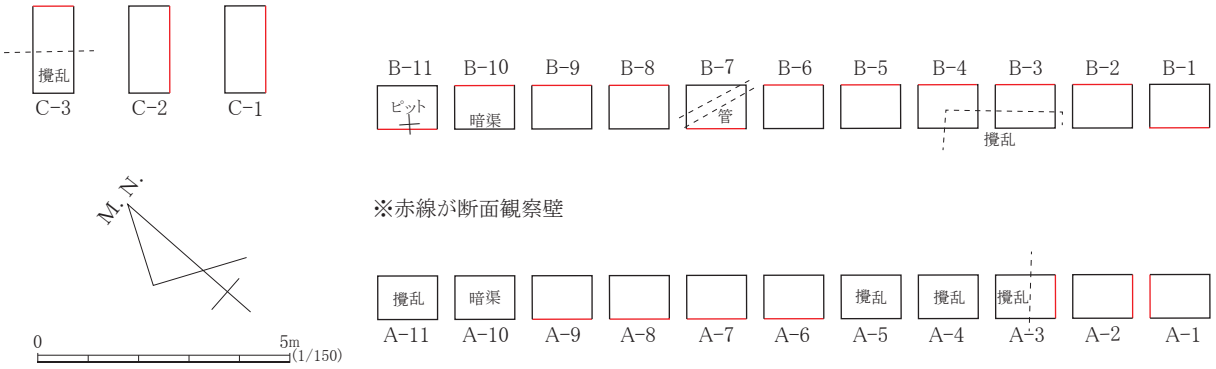

図 94　調査区平面略図

図 95　土層断面柱状図①

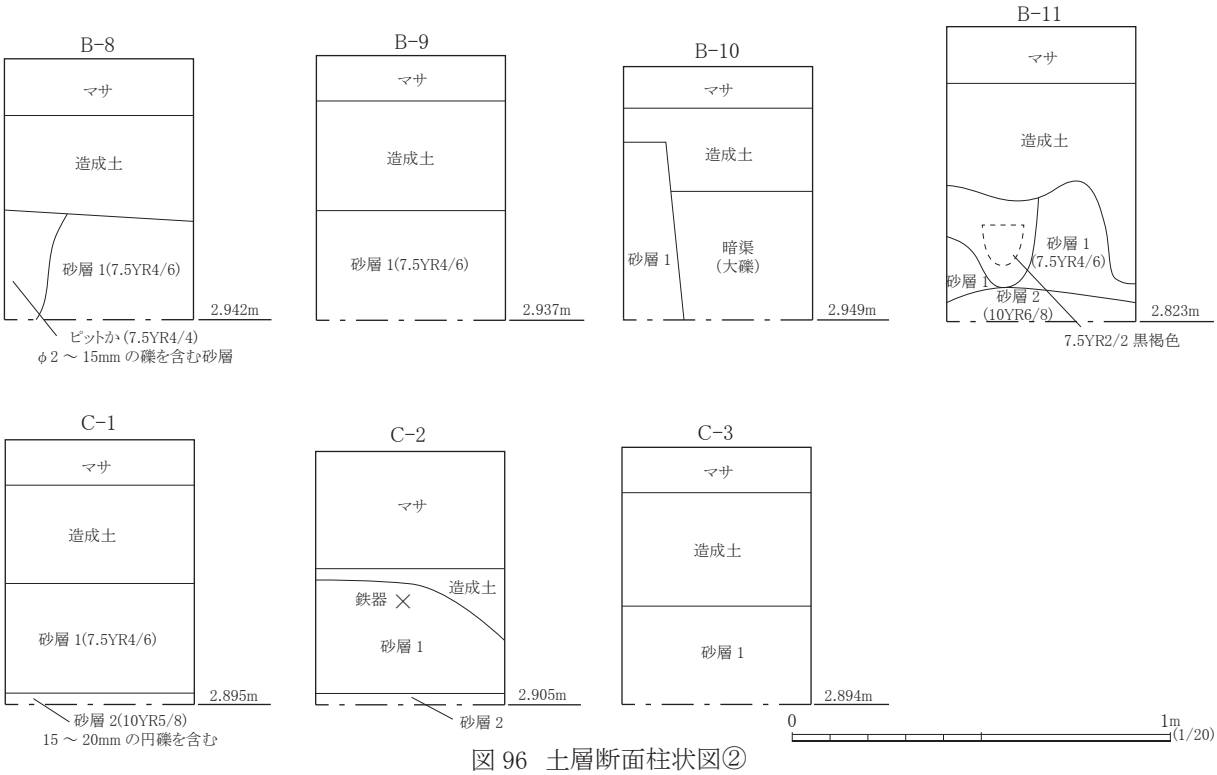

図 96　土層断面柱状図②

A地点の基本層序は①造成土が25～36㎝、②褐色砂層(7.5YR4/6)が17～33㎝、最下層の③明黄褐色砂層(10YR6/8)が最大19㎝であった。A-6においては褐色砂層の下に褐色砂層(7.5YR4/4)が20㎝確認された。A-4・5・11は全面的に攪乱を受けていた。A-10では地表下33㎝で大礫を用いた暗渠を検出した。

B地点の基本層序は①造成土が31～46㎝、②褐色砂層(7.5YR4/6)が20～34㎝、最下層の③明黄褐色砂層(10YR6/8)が最大23㎝確認された。B-3・4は西半は大きく攪乱を受けていた。B-11南西壁では褐色砂層の上面、地表下35㎝においてピット状の落ち込みが検出された。幅約57㎝、深さ27㎝で、中央部に黒褐色砂(7.5YR2/2)が充填していた。落ち込みの埋土は極暗褐色砂(7.5YR2/3)であった。B-10ではA地点と同様の大礫を用いた暗渠が検出された。A-10からB-10にかけて延びているものと考えられる。

C地点の基本層序は①造成土が29～42㎝、②褐色砂層(7.5YR4/6)が17～33㎝、最下層の③明黄褐色砂層(10YR6/8)が最大で約5㎝確認された。C-3の西半は攪乱を受けていた。

現地で採取できた遺物はごくわずかで、B-10より縄文土器1点、A-8より須恵器1点、B-11より土師器1点、C-2より鉄器1点が出土したのみである。このうち、土師器は体部小片であったため図化していない。**1**は縄文土器、深鉢の体部片と見られ、外面に縄文(単節縄文LRか)が残る。内面はナデ。**2**は須恵器甕の体部片。外面の平行叩きはナデ消しが図られている。内面は同心円当て具痕をそのまま残す。**3**は鉄器で、棒状製品のソケット部のみが遺存している。錆割れが著しく、剥離も進行している。当資料に関しては、造成土下の砂層の出土とされるが、所属時期に疑問を残す。

光小学校運動場では、過去の調査において古墳時代の遺構が検出されており、複数の遺構確認面が確認されていることからも慎重な調査をおこなう必要がある。今回の調査においても、ピット状の遺構が確認されており、付近から遺物が出土していることから、遺構はより広い範囲に遺存していると考えられる。小学校運動場、特に体育館付近においては、今後も埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

【註】

1)河村吉行(1992)「第3章　光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』,山口

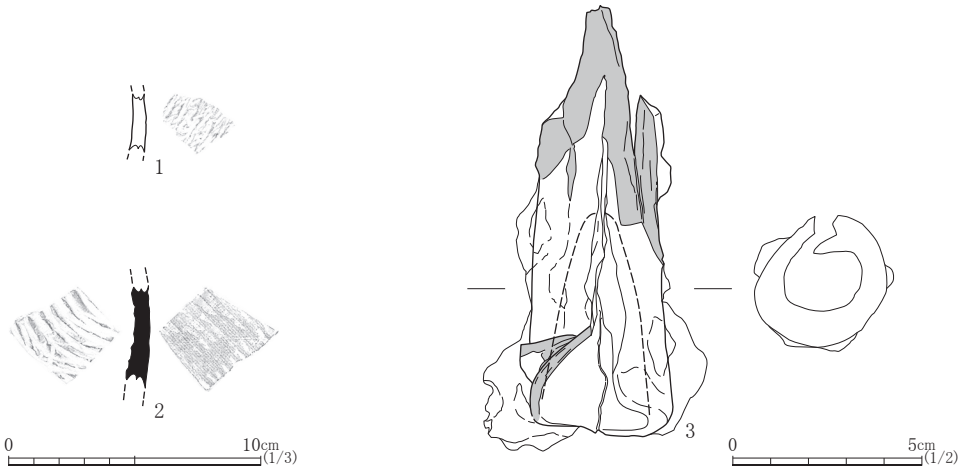

図97　出土遺物実測図

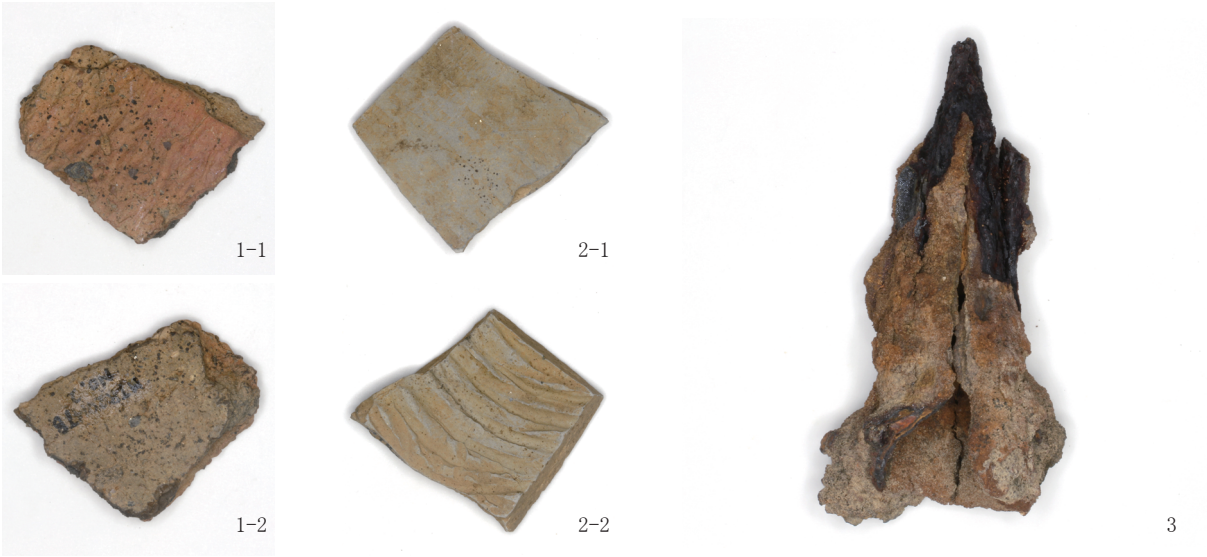

写真123　出土遺物

表14　出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	B-10	縄文土器　深鉢か	体部		①橙色(5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR6/6)	密:0.2～3㎜φの長石が少量混ざる	
2	A-8	須恵器　甕	体部		①②灰白色(5Y7/1)	密:0.2㎜φの砂粒極少量混ざる	

表15　出土遺物(鉄器)観察表

法量( )は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	法量(cm) ①長さ②幅③厚④重量(g)	備考
3	C-2	不明	①(11.5)　②③3.7　④147.6	ソケット部遺存

2. 教育学部附属光中学校校舎排水管改修工事に伴う緊急立会調査

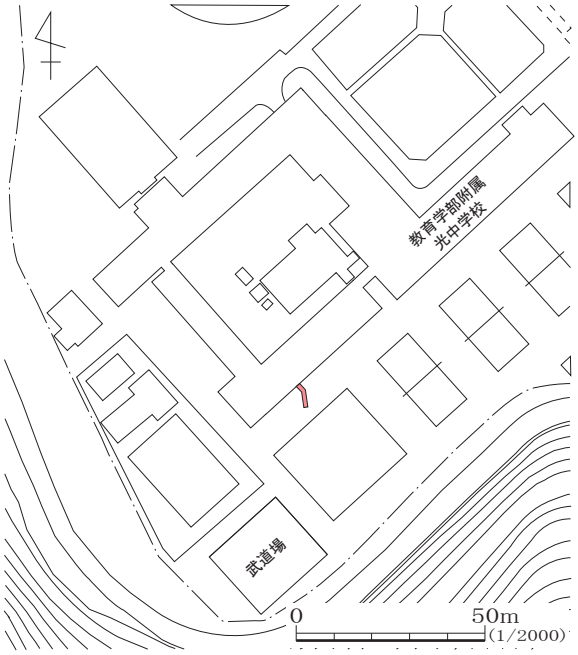

図 98　調査区位置図

写真 124　掘削地全景（南東から）

写真 125　土層断面（東から）

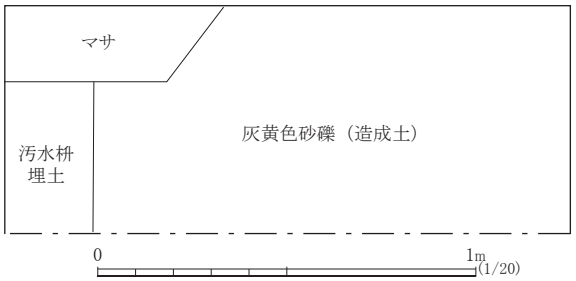

図 99　土層断面柱状図

調査地区　光構内光中学校校舎北西部

調査面積　3㎡

調査期間　平成26年8月27日

調査担当　横山成己

調査結果

教育学部附属光中学校が夏期休業を迎えた平成26年7月28日に、施設環境部より校舎排水管のつまりが発生したため調査したところ、排水管の接続もれが発見されたことを受け、早急に復旧したいとの連絡を受けた。

当下水道は2年前の平成24年度に接続工事が実施されたばかりであり、今回改修する場所は接続工事時に行った立会調査にて遺構が検出された44地点[註1]付近であることから、工事時の緊急立会調査を実施することとなった。

その後、施設環境部からの工事工程連絡を待ったが、予算が捻出できないこと、施工業者が決まらないことなどを理由に、着工されたのは夏期休業が終了する直前の8月27日であった。

改修工事は最深で60㎝の掘削が行われたが、造成土内にとどまった（図99）。

光構内は、当館が所在する山口市吉田構内からおよそ70㎞弱と最も距離が離れており、ライフライン破損等に対する緊急な埋蔵文化財保護対応が困難な場合が多い。今回は工事実施まで期間があったため対応可能であったが、所轄自治体との連携が不可欠である。

【註】

1）田畑直彦・松浦暢昌（2016）「教育学部附属光小学校下水道接続工事に伴う本発掘調査・立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』,山口